

Chord Tone Arpeggio Basic Training vol.01

確実に覚えておきたい、コードトーン・アルペジオの話 ～XM7、6弦ルート4種のパターン～

今回は、XM7 コードの6弦ルートから派生するアルペジオを全て学んでしまいましょう。

大方、基準にする音から、ヘッド側、真下(6→1弦側、もしくは逆)、ボディ側の3方向へ基本のアルペジオが弾ければ、プレイの幅としては問題ありません。(※XM7コードのアルペジオなので、全てroot、M3rd、P5th、M7thの順(下降は逆)で音が並んでいます)

弾き方(練習の仕方)としては、

- ・ 始めの音から終わりの音までひとまとめにして弾き切る(譜例1の様な形)
- ・ 1オクターブ程度の範囲で把握する

辺りが基本になるかと思います。

フレーズとして使う場合は、さらに細かく分割することもあるでしょう。

ということで、説明はこのくらいにして、実際に弾いていきましょうか。

譜例1、CM7、6弦ルート、コードトーン・アルペジオ、その1

(※以下、全ての譜例で1→6弦に戻る時も同じ指使いで弾きます)

これは、6弦のルート音からヘッド側に展開した弾き方になります。

スケールポジションで言うとCメジャースケールのこの中にありますね。

続いて、同じルート音からボディ側に進むパターンです。

譜例 3、CM7、6弦ルート、コードトーンアルペジオ、その3

このアルペジオの見方は、6弦ルートのバレーコード(赤枠)やXM7コードのヴォイスングを基準に見ると良いと思います。

最後に、こちらもボディ側に進むパターンですが、1オクターブ事にポジション移動をする弾き方です。

譜例 4、CM7、6弦ルート、コードトーンアルペジオ、その4

譜例の指使いを見ながら、ほとんど同じ形のまま移動する感覚を掴みましょう。

全てのアルペジオに言えることですが、必ずしも、譜例に記した指使いを守る必要はありません。

このテキストでは、暗記や把握がしやすくなるであろうものを乗せていますが、実際に使う時は、フレーズや前後の流れに合わせて自由に調整してください。

最後に、これらのアルペジオを理解、把握しやすくするためのポイントと、フレーズ作りへの活かし方のポイントを挙げておきます。

■アルペジオが把握しやすくなる、他の要素との関係性

- ・ その場所(基準にするルート音の位置)を中心とした、コードのヴォイシングと重なってくる
- ・ その場所(基準にするルート音の位置)を中心としたスケールポジションと重なってくる
- ・ その場所と隣り合ったコードヴォイシング、スケールポジションと重なってくる
- ・ どの要素と絡めて考える時も、インターバルの把握を最重要視する

■コードトーン・アルペジオのフレーズ作りへの活かし方

- ・ その(形の)まま、そのコードの上で使う
(※例、CM7のアルペジオをCM7上で使う、等)
- ・ その(形の)まま、他のコードの上で使う
(※例、CM7のアルペジオをDm7上で使う、等)
- ・ アルペジオを分割してみる
- ・ 他の種類のコードトーンアルペジオと繋げてみる
- ・ アルペジオの音の順番(並び)を変えてみる

これらのことを本格的に学ぶのであれば、もう少し詳しく解説したいところですが、その辺りはまた別の機会にお話ししていこうと思います。(※過去に配布した教材でも解説しているので、そちらも参考にしてください)

それでは、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼